等と出鱈目を吹いて、暗に虐待防止策を施して置く元氣者も有る、此外に猶、

繪かき〳〵と輕蔑するな、是でもヴイナス（美の神）の寵兒（たまひもの）

何だ此野郎柳の毛虫、拂ひ落せば又すがる

等が有る、高い聲では云はれないが、何をくよ〳〵の替唄に「何をくよ〳〵川端玉章、金のたまるを見て暮す」と云ふのが有る、作者の名はつい逸したが、流石に傍若無人の連中も、此ばかりは敬意を拂つて胡魔化して歌つてるさうな、可愛い所は斯麼（こんな）所に有るんです。

⑥ 依嘱製作凱旋門

これについては「東京美術学校近事」（316頁）にも記事があるが、『美術新報』第四巻第十九号（明治三十八年十二月二十日）は一層詳しくこれを伝えている。

○上野の凱旋門　上野黒門口凱旋門は十一月二十二日畫代を組立て十二月十三日建物及裝飾の全部を竣成し、夫より三日間にて上部の置物勝利神獅子及陸海軍人立像を製作し、十五日を以て悉皆工を終たるを以て十七日午前十時より落成除幕式を擧行したるが、右凱旋門は高五十尺幅四十八尺奥行十四尺道高き幅共二十四尺にして、全體の設計は美術學校教授工學士古宇田實氏の擔當に成り、上部置物中央軍神と馬四頭車臺、金鵄、四隅獅子等は美術學校の塑造科にて原型を造り、内部の天井裝飾平和の女神は美術學校教授岡田三郎助氏主任として小林萬吾氏之を助け、正面左右の陸海軍人は新海竹太郎氏の原型によるものにして、全體クラシック式によれりと。

○上野凱旋門の天井裝飾　美術學校洋畫科の擔任にて、教授岡田三郎助氏の立案下繪に成り、小林萬吾氏外學生十七人晝夜兼行にて描き上げ金鵄を置きしものなるが幅二間長六間の天井に布代繪具代にて研究的に引受けしものなりといふ。其圖柄は左右前後に女神を現はせしものにて、左方の中央には地球を掌上に載せたる名譽の女神を畫き兩側に忠實親和の二神を現はし、忠實の神には犬を添ふ。左方の中央には勝利の女神月桂冠を手にして起ち、平和と融和の二神を從へ、平和の神は其手の果物を鳩の喙ばまんとする所を示し、融和の神は喇叭を携へ、前後には人道と公正とを示せり。猶天井の四圍には樫樹と橄欖樹の枝葉を繞らせり。全體希臘神話に基きしものなりと。

⑦ 学生生活

回顧片々　　廣川松五郎（談）

〔中略〕

中學を終へて田舎から出て來た計りの僕は――君達もそうだつたらうが――非常に美校入學に憧れてね、どうしても入つてやらうと頑張つた。其年の卒業製作展を見に行つたが不思議に印象に殘つたのは二つ程のステーンド・グラスの圖案で、それが何時までも感銘深く、實に印象的で今でも不思議に腦裡を離れないからおかしいね。それが富本憲吉君の卒業製作だ。

當時はアールヌーボーの全盛時代でよく外國雜誌等にあるあの

ハイカラな色調が何とも言へず美しかつた。二三年前富本氏に此の話した折言はれた所によれば、ステーンド・グラスは附たりで主として室内装飾のドローイングが主要作品だつたと言ふ。少年の僕にそんな地味な製圖は全然記憶にのこらず、新様式でパツとしたそのステーンド・グラスしか印象になかつたのだ。これは君達を指導する上にも反省させられる面白い體驗だと思つてゐる。

明治卅八年、入學した時は嬉しかつた。落第と思ひ込んでゐたんだから。

第一學期の實習は全部毛筆畫のお稽古。僕は全然妙に穂の長い毛筆と言ふものを使つた事がなかつたのに同級生は皆實にうまい。すつかり悲觀して、何時になつたらあんなに描けるかと焦燥してゐた。こんな具合だつたから實によく努めた。死物狂ひで勉強したよ。今でも思ひ出すと頰に紅潮を感じる。

〔中略〕

上級生の誰か知らんが、假張いつぱいに木炭で漫畫を畫いてあつたのを見た。

島田〔佳矣〕・千頭〔庸哉〕・小場〔恒吉〕・竹内〔久一〕等の諸先生の顔が實に特長横溢で單純な線でカリカチユアされてゐる。これは才能のある者の仕業であると思つたんだが、どうしても今でもそれが上級生の誰れの仕業かわからずしまひだ。

明治四十年の火事の時僕は谷中の下宿屋に住んでゐたんだが、いつもの様に歩いて登校すると……門の中に學校が無い。これには驚いた。原つぱにブス〳〵殘骸が燻つてゐる。金庫ばかりがぽつねんとその中に黑い姿を見せてゐる。藤島武二先生が礎石の上に立つて悄然として……長身でワイルドネクタイを風になびかせ乍ら……美しい先生だなと思つた。

僕達は教務室と思はれる燒跡で、入學試驗の際添へて出した各自の寫眞を發見し半焦げの肖像を棒の先きで掘り當てゝ一種の感傷に打たれて居た。此の時の僕の感銘は數十首の短歌となつて當時の校友會雜誌に出た筈だから序での折文庫で讀んで呉れ給へ。何でも故小山内薫氏が（當時讀賣記者）火事の三面の種を取りに來たのを覺えてゐる。

燒けた校舍は前の教育博物館の建物だが其講堂には忘れ難いものがある。薄暗い、陰氣な部屋であつたが懐しい。片隅に置いてあつた久米〔桂一郎〕さんの解剖學用の骸骨の白い無氣味さ、そして合田清先生の佛蘭西語の講義等々。

ある時文藝部でこの講堂で講演會を開いた事がある。處が當の講演者である岩野泡鳴が一時間たつても未だ來ない。皆が騒ぎ出す。委員はすつかり困り果てゝゐた時、委員の一人であつた岡本一平がチヨークで黑板の上に一筆描きをお目にかけます、とばかり矢庭に鳥や動物の略畫を描いたもんだ。それが實にうまい。皆驚いてしまつた。時間つなぎにこれで氣轉（機）をきかした一平さんは遂に後年この才能を大成させたことになる。學生時代から天禀があつたんだね。

市川左團次の新劇運動——自由劇場、それから藝術座、この新興劇壇の擡頭と私の青春期とは二つに切り離せない。スバルや三田文學派を自任して居た僕は小山内さんの仕事に傾倒して居たんだね。其最初の旗上げは本郷座のボルクマンだが、メーテルリン

クのタンタヂルの死の有樂座公演の時は徹夜でポスターを作つた。木綿の上に模様を染料で型附したりするんだから一枚仕上げるに大變な勞力だ。徹夜組の中では今の早大教授今和次郎、家具屋の梶田惠、圖案家齋藤佳三などが居る。

初日に有樂座へ連見するのに慶應の文學部では御大の永井荷風までが若返つて左團次の名を染め抜いたそろひの手拭で出掛ける趣向と噂に聞いたので「美校何ぞ負けんや」の茶目盛り、僕の案で皆が紅い土耳古帽をかぶつて出掛け、有樂座の見物席を大半海老茶いろに彩って喝采を拍[博]したものだ。トルコ帽は一個二十二錢也、ボール紙に更紗を張り、毛絲の房を附けたものだ。

帽子の話が出たから附け加へよう。ルノアールの愛弟子で歸朝前から評判だった梅原龍三郎氏（當時良三郎）がフランスから歸つた當時のドンファン型の美男子振り、あの黑ラシヤのつば廣帽子、これを早速眞似したのが僕、更らにその模倣者に川路柳紅[虹]・高村豐周・田邊孝次・文人室生犀星などがある。（圖・三　石山彰記）〔下略〕

（『東京美術学校校友会誌』第十九号。昭和十五年十月）

〔編者註――右文中、梅原龍三郎の帽子を真似した広川、川路、高村、田辺らはいずれも校友会文学部の中心メンバーであった。広川は梅原について次のようにも記している〕

〔上略〕

既にして私は上級生であつた。校友会委員は同期の田辺考[孝]次（故）、川路誠（号柳虹）、私の三名で、次回に開催すべき文芸[学]部講演会の人選にかかる。時の新帰朝者三名を選んで与謝野寛、有島生馬、梅原龍三郎（当時良三郎）とした。品川御殿山（？）に梅原氏を訪ねてお願にまかり出たのは正服金ボタンの筆者である。演題はバルザツクの小説『知られぬ傑作』の梗概、有島氏の題は当時セザンヌ通を以て目された人として当然な『ポール・セゼンヌ』であつた。

後年……東京美術学校長の最後の人今の学長上野直昭さんが就任と同時に梅原さんを学校へ引ぱつて来たと世の人は云うが、昔の昔の大むかし、フランスと申さうよりルノアールの工房から帰つたばかり、まだほんとの日本語がロクに使へなかった氏を初めて学校の大講堂のステーヂに引張つて来たのは、かく申す筆者である。〔下略〕

（「追想の自画像（断片）」『東京美術学校沿革略』昭和二十七年。）

〔編者註―右文中の新帰朝者による講演会は大正三年二月十四日開催で、講演者は水谷鉄也を加えて四名。また、この時点では広川、田辺、川路は卒業して研究科在学中であり、校友会委員は辞している。〕